

中江藤樹の「心」の特質 ―朱子と陽明の比較に基づいて

東北大学大学院・文学研究科・日本思想史研究室
石 咏絮（セキ エイジョ）

中江藤樹は江戸初期の儒学者であり、一時は日本最初の陽明学思想家と位置づけられてきた。しかし、相良亨氏や尾藤正英氏らの研究により、その評価は再検討され、藤樹の思想が朱子学や陽明学とは異なる独自の体系を有することが明らかとなった。これにより、「藤樹学」の思想史的意義と特質が改めて論じられるようになった。さらに、吉田公平氏は「心学」の視点から藤樹と陽明学の思想的核心を比較し、「心学」としての藤樹思想の独自性を江戸儒学史の中で位置づけた。こうした先行研究の成果を踏まえると、「藤樹学」あるいは「藤樹心学」は朱子学や陽明学とは異なる思想的基盤を有し、藤樹独自の学問体系として確立されていると考えられる。

しかし、従来の研究は主に道德論や工夫論の視点から藤樹学の特質を論じてきたものの、その根幹をなす「心」概念を本体論的視点から分析する試みはほとんどなされてこなかった。藤樹の「心」に関する最も体系的な論述は『明德図説』および『持敬図説』に見られるが、これまでの研究では、これらの図説における「心」の概念そのものを独立した研究課題として精査する視点が十分に確立されていなかった。そのため、藤樹の「心」概念を精査し、朱子および陽明の思想との比較を通じてその独自性を明確にするという課題は、依然として十分に検討されていないと言える。

したがって、本発表では、『明德図説』および『持敬図説』における「心」の概念に焦点を当て、従来の研究とは異なる視点から藤樹の思想を再考する。これにより、従来の研究で見落とされてきた「心」の本質を明らかにし、さらに朱子・陽明との対照を通じて藤樹心学の思想的特質を解明することを目指している。本発表は、藤樹学の本体論的理解を深め、既存の研究を補完し、藤樹思想の独自性を新たな視点から提示することを目的としている。